



令和 7 年度病害虫発生予報第 8 号

令和 7 年 9 月 1 0 日

鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	—	やや多い
果樹	ナシ	黒斑病	—	平年並
		黒星病	—	やや少ない
		クワコナカイガラムシ	—	平年並
		シンクイムシ類	—	やや多い
		ハダニ類	—	多い
果樹	ブドウ	べと病	—	やや少ない
		チャノキイロアザミウマ	—	やや少ない
		ハマキムシ類 (チャノコカクモンハマキ)	やや早い	やや多い
果樹	共通（ナシ、カキ）	カメムシ類	—	平年並
野菜	ネギ	軟腐病	平年並	やや多い
		白絹病	平年並	平年並
		黒斑病	—	平年並
		ネギハモグリバエ	—	平年並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	やや多い
	ナガイモ	炭疽病	—	平年並
		ナガイモコガ	—	平年並
		ハダニ類	—	平年並
	ブロッコリー	べと病	平年並	平年並
		黒腐病	平年並	平年並
		軟腐病	平年並	平年並
		黒すす病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	平年並
		コナガ	平年並	平年並
		ハイマダラノメイガ	平年並	やや多い
野菜	ブロッコリー、イチゴ	ハスモンヨトウ	—	やや多い



気象予報（抜粋）

1 か月予報（9 月 6 日～10 月 5 日：9 月 4 日、広島地方気象台発表）

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

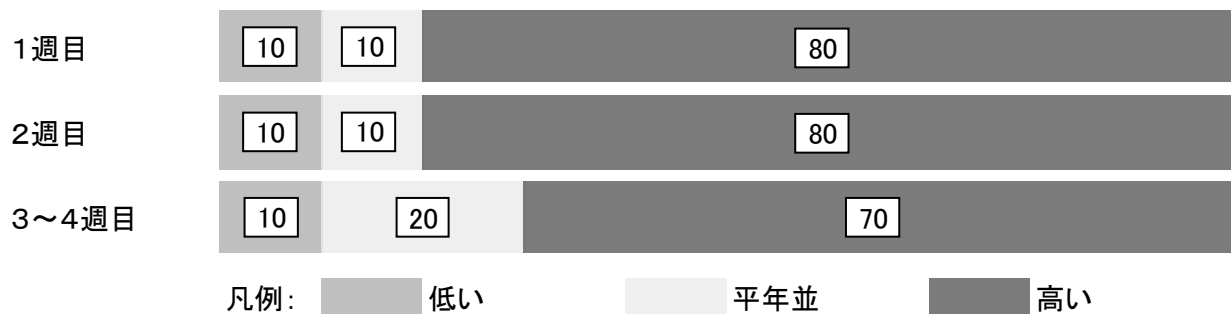
向こう 1 か月の平均気温は、高い確率 80 % です。

週別の気温は、1 週目は、高い確率 80 % です。2 週目は、高い確率 80 % です。3～4 週目は、高い確率 70 % です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率($\%$)>



<気温経過の各階級の確率($\%$)>



普通作物

[ダイズ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7 月第 4 半旬～8 月第 6 半旬の、フェロモントラップへの総誘殺数は平年よりやや多い。

イ これまでのダイズの生育状況、本種の発生状況及び向こう 1 か月の気象予報から、発生量は平年よりやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ジアミド系殺虫剤を散布する。

イ 防除の目安は、1 a 当たりの白変葉か所数 5 か所以上とする。なお、白変葉の確認にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内でも観察を行う。



果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）の新梢葉における発生量は平年に比べて多い。

イ 9月上旬現在、現地ほ場において本病の発生は目立っていない。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液などを散布する。特に、現在、新梢葉の発病が多い園では、収穫後の薬剤散布を徹底し、病原菌の感染を防ぐ。

ウ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を実施する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬現在、現地ほ場における収穫果被害は平年並である。

イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を実施する。

イ 収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液又はベルコートフロアブル1，500倍液などを散布する。

ウ 秋季防除として、‘新甘泉’では10月上旬頃にチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液、10月中旬頃にオキシラン水和剤600倍液を散布し、多発園では11月上旬～下旬頃に1～2回の追加散布を行う。追加散布薬剤は、デランフロアブル1，000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液などがある。なお、その他の品種は各地域の防除暦を参考とする。

エ 異なる品種の混植園などで薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数、散布回数など）に注意する。

オ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を実施する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発 生 量 平 年 並



(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるクワコナカイガラムシの被害果率は0%（平年：0%）と平年並である。
- イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋期に本種の発生が認められる園では、越冬量が増加し、翌年に多発する可能性が高いことから、収穫後の防除を徹底する。
- イ 多発園では、収穫終了後にダイアジノン水和剤34の1，000倍液などを散布する。

4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地9地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は、ナシヒメシンクイは平年に比べてやや多く、モモシンクイガは平年並である。
- イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）におけるシンクイムシ類の果実被害は平年に比べてやや多い。
- ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、シンクイムシ類の発生盛期であるため、晩生品種（‘新高’、‘新興’、‘王秋’など）では防除を徹底する。
- イ 薬剤は、シペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2，000倍液又はイカズチWDG1，500倍液）、テルスターフロアブル3，000倍液、サムコルフロアブル10の5，000倍液、フェニックスフロアブル4，000倍液などを使用する。

5 ハダニ類（カンザワハダニ，クワオオハダニ，ナミハダニ）

（令和7年8月14日付けで病害虫発生予察注意報第2号を発表）

(1) 予報の内容

発生量 多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は1.3頭（平年：0.3頭）と平年に比べて多い。
- イ 8月下旬現在、現地ほ場においてハダニ類の発生の多い園が認められている。
- ウ 向こう1か月の気象予報は、ハダニ類の発生にやや好適な条件であり、発生量は平年に比べて多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生密度が高い園では、越冬密度を低減させるため、秋期の対策（薬剤散布、紙バンド巻きなど）を徹底する。
- イ 防除薬剤に関しては、令和7年度病害虫発生予察注意報第4号を参照のこと。



[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予察の内容

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬現在、現地ほ場において本病の発生は目立っていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を1～2回行う。

イ 薬剤は、収穫終了後にムッシュボルドーDF500倍液などを散布する。なお、無加温ハウス栽培でのビニール除去後及び露地栽培では、散布時に固着性展着剤を加用する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）の黄色粘着トラップにおける本種の誘殺数は、平年に比べて少ない。

イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年に比べてやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では、収穫終了後にコテツフロアブル3,000倍液などを散布する。

イ 9月に発生量が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

3 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ）

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）のフェロモントラップにおける本種の誘殺数は、平年に比べてやや多い。

イ 8月下旬現在、現地ほ場において本種の発生は目立っていない。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、次世代成虫の発生ピークは平年に比べてやや早い9月中～下旬頃、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近年、秋期の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。秋期の発生は越冬密度を高め、翌年春の発生量の増加を招くため、収穫後であっても注意してほ場を観察する。

イ 多発園では、収穫終了後にコテツフロアブル2,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液などを散布する。



〔果樹共通（ナシ、カキ）〕

1 カメムシ類

（1）予報の内容

発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年に比べてやや少ない～平年並である。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害は確認されていない。

ウ 8月下旬現在、園芸試験場の防風樹であるサンゴジュにおけるカメムシ類の100果あたりの寄生数は0頭（平年：1.0頭）と平年に比べて少ない。

エ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除のタイミングは、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 各樹種の防除薬剤は表を参考とする。また、農薬の使用基準を遵守するとともに、使用上の注意事項を守る。

表 果樹カメムシ類の主な防除薬剤と使用基準*

作物名	農薬の名称	希釈 倍数	使用時期	本剤の 使用回数	IRAC コード**	薬剤の系統
ナシ	ジノテフラン水溶剤 （アルバリン顆粒水溶剤 又はスタークル顆粒水溶剤）	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	4A	ネオニコチノイド [®] 系
	アクタラ顆粒水溶剤	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内		
	シベルメトリン水和剤 （アグロスリン水和剤）	1,000 倍～ 2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	3A	合成ピレスロイド [®] 系
	シベルメトリン水和剤 （イカズチWDG）	1,500 倍	収穫前日 まで			
	テルスターフロアブル	3,000 倍～ 6,000 倍	収穫前日 まで	2 回以内		
カキ	ジノテフラン水溶剤 （アルバリン顆粒水溶剤 又はスタークル顆粒水溶剤）	2,000 倍	収穫前日 まで	3 回以内	4A	ネオニコチノイド [®] 系
	アクタラ顆粒水溶剤	2,000 倍	収穫3日前 まで	3 回以内		

*農薬の登録内容は令和7年8月末現在

**IRAC コードは殺虫剤の作用機構の分類を示す。



野 菜

[ネ ギ]

1 軟腐病（令和7年7月29日付けで令和7年度病害虫発生予察注意報第3号を発表）

（1）予報の内容

発生時期 平 年 並
発 生 量 やや多い

（2）予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量はやや多い。
- イ 本病は高温多湿で発病が助長される。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

- ア ネギに傷がつくような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので、避ける。
- イ ナレート水和剤1，000倍液、スターナ水和剤2，000倍、ヨネポン水和剤500倍、コサイドDF1，000倍液、Zボルドー500倍液、クプロシールド1，000倍液などを7～10日間隔で2～3回散布する。

2 白絹病

（1）予報の内容

発生時期 平 年 並
発 生 量 平 年 並

（2）予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は高温多湿で発病が助長される。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 9月に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2，000倍液、カナメフロアブル4，000倍液、ジオゼット水和剤500倍液などを株元散布する。

3 黒斑病

（1）予報の内容

発 生 量 平 年 並

（2）予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足によって発病が助長されるので、肥培管理に注意する。
- イ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルなど）600倍液、ポリベリン水和剤1，500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1，000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3，000倍液、シグナムWDG1，500倍液などを散布する。



4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種は集中的に加害し、葉を白化させるので、発生に注意する。

イ 土寄せ時にはベストガード粒剤 6 kg / 10 a の株元処理を行う。

ウ 散布剤はアグロスリン乳剤 2,000 倍液、ディアナSC 2,500 ~ 5,000 倍液、ファインセーブフロアブル 2,000 倍液、グレースシア乳剤 2,000 ~ 3,000 倍液、ヨーバルフロアブル 2,500 ~ 5,000 倍液などを散布する。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、高温少雨条件下で発生が助長されるため、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 土寄せ時にはベストガード粒剤 6 kg / 10 a 株元処理、ダントツ粒剤 3 ~ 6 kg / 10 a 株元処理などを行う。

イ 散布剤はウララDF 1,000 ~ 2,000 液倍、ハチハチ乳剤 1,000 倍液、ディアナSC 2,500 ~ 5,000 倍液、ベネビアOD 2,000 倍液、ファインセーブフロアブル 1,000 ~ 2,000 倍液、グレースシア乳剤 2,000 ~ 3,000 倍液などを7 ~ 10 日間隔で散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、高温少雨条件下で発生が助長されるため、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢期に防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ ネギの薬剤は、トルネードエースDF 1,000 倍液、スピノエース顆粒水和剤 5,000 倍液、ディアナSC 2,500 ~ 5,000 倍液、グレースシア乳剤 2,000 ~ 3,000 倍液、ヨーバルフロアブル 2,500 ~ 5,000 倍液などを散布する。



ウ ナガイモの薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1，000倍液を散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における本病の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 茎葉の繁茂により薬剤が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

イ 大雨や台風の直後には、天候回復後にできるだけ早く薬剤散布する。

ウ 薬剤は、ダコニール1000の1，000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液、アミスター20フロアブル2，000倍液などを散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）において、発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、アタブロン乳剤2，000倍液、トレボン乳剤1，000倍液、モスピラン顆粒水溶剤4，000倍液、プレバソンフロアブル5の2，000倍液などを7～10日間隔で2回程度散布する。

イ 茎葉の繁茂により薬剤が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハダニ類を対象にコロマイト乳剤1，000倍液など、カンザワハダニを対象にコテツフロアブル2，000倍液を葉裏にも付着するように丁寧に散布する。



[ブロッコリー]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は気温が比較的低温、降雨が多いと発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、フォリオゴールド1，000倍液、レーバスフロアブル2，000倍液、シグナムWDG1，500倍液、メジャーフロアブル2，000倍液などを予防散布する。なお、フォリオゴールドは花蕾形成前までに散布する。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。

イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないよう注意する。

ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。

エ 薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又はカップーシン水和剤）1，000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、気温が高く、降雨が多いと発生が多くなる。また、台風に伴う風雨によっても発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。



- イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤を散布する。
- ウ 薬剤は、ナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液、クプロシールド1,000～1,500倍液などを散布する。

4 黒すす病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。

イ 本病は、気温25℃付近が発病適温であり、多湿条件下で発生が多くなる。また、降雨と強風により発生が多くなるため、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。

イ 薬剤は、定植前の苗にパレード20フロアブルの100倍液を0.5L/セルトレイを灌注する。生育期間中は、シグナムWDG1,500倍液、アフェットフロアブル2,000倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、メジャーフロアブル2,000倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本ぼでの発生時には、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液、ランネート45DF1,000～2,000倍液、ウララDF2,000～3,000倍液、トランスフォームフロアブル2,000倍液などを散布する。

6 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は平年並である。



イ 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、プレバソンフロアブル5の100倍液、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本ぼでの発生時には、トルネードエースDF2, 000倍液、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、アニキ乳剤1, 000～2, 000倍液、グレース乳剤2, 000～3, 000倍液、ブロフレアSC2, 000～4, 000倍液、ヨーバルフロアブル2, 500～5, 000倍液などを散布する。

7 ハイマダラノメイガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、高温少雨条件下で発生が助長されるため、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼苗期（育苗期や本ぼでの生育初期）に、幼虫が生長点付近を加害する。加害されると芯止まりになるので、早期発見・早期防除に努める。

イ 苗の育苗期後半～定植当日には、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。

ウ 本ぼでの発生時には、フローバックDF1, 000倍液、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、アフームエクセラ顆粒水和剤1, 000～1, 500倍液、プレバソンフロアブル5の2, 000倍液、ヨーバルフロアブル2, 500～5, 000倍液、グレース乳剤2, 000～3, 000倍液、ブロフレアSC2, 000～4, 000倍液などを散布する。

[ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数はやや多い。

イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、高温条件下で発生が助長されるため、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。
各種情報は右の QR コードからご覧いただけます。



イ ブロッコリーでは、ディアナ SC 2，500～5，000 倍液、アニキ乳剤 1，000～2，000 倍液、プレオフロアブル 1，000 倍液、ファルコンフロアブル 4，000 倍液、グレースシア乳剤 2，000 倍液、ブロフレア SC 2，000～4，000 倍、ヨーバルフロアブル 2，500～5，000 倍などを散布する。

ウ イチゴでは、マッチ乳剤 3，000 倍液、フェニックス顆粒水和剤 2，000～4，000 倍液、トルネードエース DF 2，000 倍液、グレースシア乳剤 2，000 倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索できます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導などに際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病害虫防除所ホームページ>

アドレス <https://www.pref.tottori.lg.jp/boujosyo/>



病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類など）、病害虫の診断方法などの参考情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係

〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病害虫防除所

（電話：0857-53-1345、電子メール：byogaichu@pref.tottori.lg.jp）

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

（電話：0857-53-0721、ファクシミリ：0857-53-0723）

果樹・野菜関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

（電話：0858-37-4211、ファクシミリ：0858-37-4822）

※次回、予報第 9 号の発表は 10 月 8 日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。
各種情報は右の QR コードからご覧いただけます。



令和 7 年 秋の農作業安全運動（9 月 1 日～10 月 31 日）実施中

急がず・焦らず・怠らずで、生産第一よりも安全第一の農作業
安全に農作業できるよう、家族や地域で声をかけ合いましょう。

鳥取県農林水産部経営支援課ホームページ、農業機械・農作業安全
令和 7 年 秋の農作業安全運動（9 月 1 日～10 月 31 日）

<https://www.pref.tottori.lg.jp/119790.htm>

＜連絡先＞

〒680-8570 鳥取市東町 1-220

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課農業普及推進室
（電話：0857-26-7327、FAX：0857-26-7294）